人の死や追悼は国家のものではない

―― 靖国神社への父の合祀が「天皇の意思」とは！ ――

坂元良江

幼い頃、靖国神社は私の遊び場だった。私は千代田区（元麹町区）五番町に生まれた。公園へ行くような気分で私たちはよく靖国神社へ散歩に出かけた。境内の鳩と遊ぶ写真がある。若く美しい母と一緒だ。父は娘の写真を撮るためにカメラを買ったということだ。幸せだった家族の思い出の場所が靖国神社というのはなんとも皮肉だ。

父は生後七五日の弟から六歳の私まで四人の幼子を残して一九四四（昭和一九）年五月に出征し、帰って来なかった。残された私たち家族も疎開し麹町の家は焼けた。戦争未亡人となった母は、身よりもない疎開先の信州で極貧の中で四人の子どもたちを育てあげた。父のカメラも売られていった。高校を卒業し上京して一人で学生生活を始めた一八歳の日から今にいたるまで五〇年近い歳月、私は一度も靖国神社へ行っていない。

▽二代つづいた「戦争未亡人家族」△

私の父は日露戦争で父親を亡くし同じく戦争未亡人の母親に育てられた。我が家は親子二代の戦争未亡人家族だった。父の骨箱（遺骨ではない）が届いた時、夫と長男の二人を戦争で失った姑の哀惜を思うと嫁の私が泣いてなどいられないと思ったと、母は後になって書いている。私自身は夫を戦争に送り出すことも息子に赤紙が来る心配をすることもなく六〇歳代となった。平和憲法があればこその五〇余年だった。今孫息子はもうすぐ四歳、この子たちの世代を戦争に行かせないために憲法九条を死守したいと思う昨今である。

▽母は「日本遺族会」を退会した△

戦後まもなく、田舎の小さな村で疎開家族、戦争未亡人家族として片身狭く暮らしている頃、母は日本遺族会に入っていた。一九四七年に発足した日本遺族会は当初は遺族たちにとって数少ないよりどころであり、遺児たちがやっと食べられるようになった遺族年金の制度を作る力にもなった。しかし、間もなく「英霊顕彰」をあげ戦争を美化するようになり、やがて自民党の票田となり、会長に遺族でもない自民党幹部がなるに及んで、日本遺族会は完全に自民党のものとなった。

日本遺族会を退会した母は「平和を願い戦争に反対する戦没者遺族の会」（平和遺族会）に参加し、会が編纂出版した「平和への手紙～戦没者遺族の手記～」に手記をよせている。母はそこに、「夫は〝お召し〟という朕の命によって出征し、朕の命によって死んだ。夫は天皇に殺されたのだと固く信じて疑わない」と書いている。遺族たちの無念の叫びの数々や辛酸をなめつくした戦後の暮らしは、その頃の母の姿と重なり、今読み返しても涙が止まらないが、中には「日本軍が行なった侵略戦争、略奪や婦女暴行、拷問、虐殺の生々しい事実から目をそらさず認めることは私たち遺族にとってはつらいことかもしれない。しかし、一人の戦死者の背後には、その数倍、数十倍の相手国の人びとの死と苦痛がある」と戦場になったアジアの国を慰霊のために旅行して感じたことを書く人もいる。七月一六日『朝日新聞』の声欄の投書は「ポツダム宣言受諾の決断が早ければ原爆は投下されず自分の父親も戦死しなかった。A級戦犯を靖国神社に合祀するなど戦争遂行の最高幹部の責任があいまいなままだ」と批判している。

▽天皇制存続のための無駄な死△

一九四五年七月二六日のポツダム宣言から八月一五日までの間、天皇と政府は何をしていたか、ポツダム宣言受諾の条件として「天皇制存続の確認」をすることだった。そのために貴重な時間を使い、死ななくてもいい大勢の人びとを殺した。天皇は自分の身の安全を確認して「ご聖断」を下したのだ。「Emperor Remain」と大きな見出しの当時

の『ニューヨーク・タイムズ』紙を後年になって見る機会があった。

国家は、戦死者を「国のために命を捧げた人びと」といって顕彰し、戦死は栄光であり名誉なものであると遺族にいい聞かせ信じ込ませようとする。それは、次の戦争のために必要不可欠な儀式なのだ。しかし、はるばる北陸の村から靖国神社合祀の大祭に参加し「間に合わん子をなあ、こないに間にあわしとてつかさってな、結構でございます」「天子様のおかげだわいな、もったいないことでございます」（『主婦の友』一九三九年六月号）と戦死した一人息子を語り、ひとり村へ帰っていった母たちも、敗戦の後には「今になれば、なんのために、大事なムスコ死なせたか、わからねぐなったなス」「ダマサレタノダス」（『石ころに語る母たち』　未来社）と息子の死の意味を理解するのだ。

▽父は「英霊」などではない△

侵略戦争の兵隊は、侵略され犯される側にとっては侵略者であり加害者である。三六歳にもなって招集され二等兵として中国に渡り、敗戦後の九月二三日、細菌性赤痢、マラリアで戦病死した私の父も、もちろん同じだ。父の死はただの犬死だったと私たち家族は思っている。そればかりか、父は戦地で中国人を殺したのだろうか、従軍慰安婦を買ったのだろうかと、今も私は苦しめられている。だから、私にとって父親が英霊として靖国神社に祀られているなどといわれることは、迷惑千万なことであり、そんな実感も全く無いから近くを通ってもお参りをしようなどと思ったこともない。むしろ軍国主義の牙城のように思えて、意図的に近づかないことにしてきた。キリスト者や植民地出身の「日本兵」の遺族が合祀とり下げ要求を出した時に、私も父の合祀とり下げ要求をしようかと思ったこともあったが、むしろ父は靖国神社になどいないと思うほうが自分の気持ちに正直だった。

天皇の赤子として戦争に行き、天皇のためにといわれて死んだ人びとは、天皇の意思により靖国神社に合祀されたのだということだ。合祀取り下げ要求をしたプロテスタントの角田三郎牧師にたいして靖国神社は「天皇の意思により戦死者の合祀は行なわれたのであり、遺族の意思にかかわりなく行なわれたのであるから抹消することはできない」と言明したそうだ。私の父をはじめ多くの太平洋戦争の戦死者は戦後になって合祀されている。新憲法発布後という人も多いはずだ。それでも「天皇の意思」は有効なのだろうか。靖国神社にだけは戦中からの「天皇の意思」が今も生き続けているとは、まったく理解しがたい。

靖国神社は解体され、追悼はそれぞれの遺族たちの手に任せるのが望ましい。無宗教の国立戦没者追悼施設などというものもいらない。人間の死や追悼は国家のものではなく、個人のものであると思うからだ。国家の手で戦死者を追悼するといわれたとたんに、胡散臭さを感じてしまう。戦意高揚に使われる日がないと信じることができないからだ。

▽A級戦犯の分祀では解決できない△

今、靖国問題が喧しい。A級戦犯の合祀が問題だという。A級戦犯を合祀したことは、彼らの戦争責任を不問にし、戦争を正当化することに通じる。では、A級戦犯を分祀すればことは片付くのか。A級戦犯が祀られていなければ靖国神社は戦没者慰霊の平和的な施設であるなどといえるはずもない。靖国神社には、戦犯級の大物戦死者から赤紙一枚で連れていかれた末端の兵隊まで、日本国が歴代行なったすべての戦争の死者たちが、望むと望まないとに関わらず銃をもって侵略戦争をした人びとが、戦争の最高責任者である天皇の意思によって祀られているのだ。合祀されている中国侵略戦争から太平洋戦争までの戦死者の数は全体の九割を超える。

中国などアジアの国ぐにが小泉首相の靖国神社公式参拝を糾弾するのは、単に靖国神社参拝やそこにA級戦犯が合祀されているからなどということではなく、それに象徴される戦争責任をないがしろにし続け、太平洋戦争を正当化さえしようとする日本への批判であることは明らかだ。たとえ小泉首相が公式参拝をやめたとしても、A級戦犯の分祀が行なわれたとしても（どちらもないことだろうが）問題の本質的な解決にはならないのだ。

（さかもと・よしえ、TVプロデューサー、会員）